

ふたり

laku231



プロローグ

実際とは関係ありません

すぐ読み終わるような短編です

「生きる」意味を考えて

ずっと歩いてる
疲れても歩いてる
暗い夜道

誰かとすれ違ったことはない
何時かもわからない
きっと夜なのだろうか

私が気付いた時には道にいて
ずっと歩いてた

どこまで歩いたんだろう
どれだけ進んだんだろう
道、道、道

行き止まりも見えない
戻っても何もなくて知ってる

「・・・」
その足は止まることを許されない
「・・・」
声に出しても誰も答えてくれないって知ってる
「・・・・・・・・スゥ」
私の息の音だけが響いてる

いろんな疑問が浮かぶ
なんで歩いてるのだろう
終わりはどこだろう
なんで誰もいないのだろう
そしてなんでそれを私は知っているのだろう

やっと見えたのは踏切

何もなかった道に突然見えた踏切

そして向こうから誰かが歩いてくる
少女の姿

そしてどことなく不思議で怖くない

踏切は音もなく
電車がくる様子もなく
ただ道を別けているかのように

少女は近づいてくる
踏切の向こうにいる少女
そして私

私はどうしてこの踏切を渡らないのか
向こうの少女もこちらへ渡ってこないのか

「・・・・・・・・」

長い沈黙
けっして重くはない

「あの・・・」

私は発した
久々に声を漏らした

「ここがどこか知ってますか？」

目の前の少女は見つめてくる

「えっと、ここがどこか知ってますか？」

少女は口を開けて言った

「・・・知らないの？」
少女は聞いてきた

戸惑いが隠せなかった
なぜあなたはここを知らないの
そんな意味にとらえられた

「知らないです」

「なんで？あなたはここをしってるはずだよ」

「・・・わからないよ、ずっと歩いてきただけだし」

「ずっとあるいてきたの？」

「うん、気付いたらこの道をずっと」

「あたしも」

「歩いてきたってこと？」

「でもねここで終わりだよ」

「終わり？」

「そう、おわり」

「えっと、あなたは誰？」

「なんでわからないの？」

少女の言ってることがわからなかった
あたしを馬鹿にしてるようではなかった
ただどうしてわからないんだというばかりに

「てをみて」

「手？」

「そうじぶんので」

見ても何もわかんなくてこともなく

わからないのと少女は言うてくる

「手を見てもわからない、これで何がわかるの？」

「じゃあ……」

と少女は指を指した

その先に指したものは踏切が光る場所

今は電車が通ってないため赤く光ってはない

でも薄らと自分の姿が見える

「……………」

わかった

ここがどこか

少女が誰なのか

ここに来て鏡なんて見たことなかったから

「もうあるくのつかれたよね」

疲れた

「もうとまっていいんだよ」

私はあなたに会うまで歩いてた

「ここからはあたしががんばるね」

ぽつりぽつり

頬を滴ってた

私は泣いてるの？

「・・・うん、うん」

声を我慢して少女にうなづくことしかできなかった

「私、ね、もっと・・・が、んばりたかった・・・」

少女は笑ってくれた

「がんばったんだね」

「だいじょうぶだよ」

「」

そっと少女は私の目の前で言葉を発したあと

私の後ろを歩いて行った

私の来た道を少女は歩く

私は踏切を渡った

「こんどはわたしがいきるね」

エピローグ

ある早朝4時

とある病院で元気な子供が生まれた

その子供は女の子だった